

公開講演

『禅と戦争』から考える

みなさん、こんにちば。今日は、集まってくださつてありがとうございました。

ここ駒澤大学を出てからもう三十年目でございます、母校に呼び戻されるなんて非常に光栄に存じます。昔話、いろんな話もありますが、今日は、大変な課題で話すことになりました。

本題に入ると言つても、これはほんとうに氷山の一角に過ぎない。かつて、これだけの人間が死んでいったことを決して簡単に説明できるものではない。それをまずもつて申し上げたい。だから、これから大いにみなさん方と討論しあつてこの問題を進めていきたいと思ひます。

私の本のエピローグのところは、こういつつうに書きました。

いうまでもなく歴史上、仏教だけが「聖戦」に参加したものではない。キリスト教における中世の十字軍はあまりにも有名であるし、今日に至るまでイスラム教徒は、自分たちの戦いを「ジハード（聖戦）」といつづける。

ブライアン・大禅・ウィクトリア

これをなぜ冒頭に申し上げるかというのと、これは、今日のテーマは、決して仏教だけ、禅宗だけの問題ではない、実に普遍的な問題である。宗教と戦争、宗教と暴力、まず、普遍的なところからこの問題に近づいていきたいと思ひます。

宗教は今日多くの殺人の原動力となつています。

宗教を肯定的に考える人達や宗教の宣伝に携わる人達は、次の事実を否定したり回避しようとしています。彼等は宗教はあくまで福音であると言ひます。その上、宗教の代弁者達は宗教がひきおこす痛みを最小限に考えます。宗教の持つ破壊的な要素を自分の属する宗派の布教資料に登場させることはまずありません。ただし学術界が歴史的な事実を根拠とするものであれば、宗教が、新聞の一面記事やテレビのニュースに登場させる要因になつていくという現状を認めなければなりません。すなわち、宗教は殺人を犯しています。また銃規制の反対者は「銃は人を殺さない、人間が殺すのだ」と言ひます。もしこの論理が成り立つならば、宗教自体は直接人を殺さないにせよ、宗教の多く

の形や表現が殺人のきつかけとなつてゐることは確かです。文字通りの殺人もあります。今日におけるいくつかの戦争または部族紛争の動機として、専門家に言わせれば、戦争の参加者達はプロテスタント、カソリック、回教、ユダヤ教、シーク教の宗教の名前が使われています。更にこれらの宗教の指導者達や信者達は敵を悪魔扱いした上で、神または神々の名のもとに敵を殺しているのです。これが宗教の現実です。

マーティン・マーティ(シカゴ大学教授)も、マーティン・マーティ、彼が、去年書いた言葉なんですけれども、マーティは、もちろん仏教のことを考えてこのようなことを書いたわけではない。仏教者から見れば、これは、キリスト教ならばそういうことをするだろうし、回教ならばそういうことをしてきたでしょう、ところが、わが仏教は違う、わが仏教は決してそのような人殺しの宗教ではない、と言いたい方もいるでしょう。

一番大きな問題は、なぜ宗教が絶え間なく人殺しと関係しているか、そこが一番大きな問題になります。アメリカの有名な神学者ラインホルド・ニーバー、この人は、戦前に、一九三二年において、次の言葉を述べている。

国家観の道徳

国家はいつも聖なる雰囲気に含まれているが、その理由のひとつとして、普遍性を主張する宗教が国家感情にあまりにも容

易に囚われ馴らされることがある。結果として宗教と愛国心が一体になつてしまふ。興味深い例として、第一次大戦前のドイツにおける全国的既成教会の精神と、キリスト教主義とドイツ主義の思想がある。普遍性を本来ならば独自であり限られた国家の生命と調和させるもつとも効果的な手段は、危機の時期において国家の目的が普遍的に有効であると主張し始める。国家は文明と文化のために闘つてゐると主張する。また、この戦いにおいては全人類の生存がかかつてゐると述べてゐる。普通の国民にとってはこのような欺瞞的態度は無知で不勉強な自己欺瞞として存在する。政治家はこのような欺瞞的態度を、目的の達成のため、国民の献身を得るために意識的に運用する。宗教家を含む文化人たるものは、欺瞞を要求する内的必然性を持つ政治家ほど意識的ではないにせよ、普通の国民以上に、まず自分自身を騙さなければならぬ。彼等は、身を捧げる合理性ならびに宗教性のある文化に助けられて、道徳的概念は普遍的でなければ真の道徳ではないと自覚している。故に国益を普遍的様子に包まなければ自分自身を捧げることはできないのである。このような方法は不可能であると認識している文化人もいるが数人に限られてゐる。しかし文化人の多くは、理屈の力を動員し、戦争がもたらす病的興奮または国家政策のおろかさ、普通の人間には考えられないほど、もつともらしい言い訳にすりかえてしまふ。

ゆえに彼等は戦時中のもっとも大きな嘘つきになる。

ラインホルド・ニーバー『道徳的な男が非道徳な社会』より
このニーバーは、仏教を考えてこのような言葉を書いたわけではありません。これはあくまでキリスト教、ユダヤ教、回教のことです。ところが問題は、仏教はその例外であるかどうか。わが仏教は違う、キリスト者のようなことは発言しない、仏教者であれば誰でもそれを言いたい。われわれだけは違うと言いたいけれども、今日の講義が終わったら、はたしてそれが言えるでしょうか。

そこに、「ゆえに彼らは戦時中の最も大きな嘘つきになる」とある。いかがですか。日本の戦時中の老師方、沢木興道老師など、有名な方々は、最も大きな嘘つきであったかどうか、これからみなさんとともにこれを考えていきたいと思えます。それで、各々がその結論をどうするか、それは自由に出してください。

ところで、本論に入る前に、有名な二人の西洋人、彼らが日本の宗教に対しどのような評価をしたか、聞いてください。

ヒトラーの言葉

英米人のような信心深いキリスト教徒が、異教徒の日本人に絶え間なく戦争で負けているのは実に奇妙なことである。この事実からみると、真の神は英米人が日夜ささげている祈りを無

『神と戦争』から考える（ヴィクトリア）

視して、日本の英雄に対してのみ慈悲を与えている。これは驚くようなことではない。なぜならば、日本人の宗教はなんといつても英雄主義の宗教であり、それゆえにその英雄達は自国の安全と名譽のために躊躇することなく命を犠牲にしている。

一九四二年四月九日

副総統ルドルフ・ヘスの言葉

我々は、日本人のように、個人主義を破壊するために闘っている。この最新流行の全体主義をもとにした新しいドイツのために闘っている。ところが、日本においてはこのような全体主義の思想はごく自然なものである。

日本においては、全体主義の思想はごく自然なものである。それを否定する方はここにもおられるでしょう。

今、日本でも、「パールハーバー」という映画をやっているわけですね。ヒトラーは、その真珠湾攻撃を非常に高く評価して、日本の宗教は英雄主義の宗教であると、高く評価しています。

問題は、われわれ仏教徒は、ヒトラーの考え方に賛成できるかどうかということです。

では、そうした言葉を踏まえて、戦時中の老師方の、または軍人たちの禅に対する捉え方を検討してみましょう。

まず、日本の軍人は、禅に対して何を求めてきたかという

ことを、軍人側の発言から少し見ましょ。

杉本五郎中佐という、あの当時軍神と言われた方は、ずっと長年にわたって坐禅をし、遺言という形で『大義』という本を遺しましたが、では、杉本五郎は禅に対して何を求めてきたのか。

大義に透徹せんと要せば、須く先づ深く禅教に入つて我執を去れ。……唯々我執を去るを専要とす。……

何故に軍人に禅が必要かと云ふと、日本人、特に軍人は君臣一体の精神に生き抜かねばならぬ。私を去らねばならぬ。自己を無くする。その禅の無の悟りこそ君臣一体の根源の精神である。私は禅を修行することによって私を無くするのだ。其処までゆくと禅そのままが皇軍の眞の精神である。……

人間は誰でも生死を明かにすることが先づ何よりも大切である。特に軍人は死を鴻毛の軽きに比し、何時如何なる場合にも、陛下のためには命を捨ててかからねばならぬ。軍人の中でも將校と云ふものは、此の精神を以つて部下の兵士を教育せねばならぬ。部下の教育と云ふことは、口先きだけでは出来はせぬ。自分で範を示し、身を以て実行することが出来ねば偏つた教育になる。禅の修行に依ると生と死を明らめ、生死を無くすることが出来る。工夫練磨して純一無雜に至り、眞乎の軍人になりたいものである。故に私の禅は軍人禅である。……

日本の国体と仏教とはよく一致してゐる。仏教でも殊に禅宗

では心身一如と云ふことをやかましく云ふ。心身一如になるためには捨心懸命の修行を要する。而して心身一如の極致は無我である。

日本は君臣一体の国である。大御心と一つに溶け合ふた時に臣民としての本来の面目が輝くのである。君臣一体の極致は無我であり滅私である。

此の無我と滅私とは決して別々の境地ではない。全く一致してゐることに気がつくのである。……

日本の仏教は天皇陛下中心のものでなくてはならぬ。それではなくては日本のものでない、活仏教とは云へない。仏教と雖も日本の国体に叶ふたものでなくてはならぬ。釈尊の教へも亦其処にあるのである。……

お寺に祀る仏像は、ほんとうから云ふならば中央に天皇陛下を御祀り申上げ阿弥陀如来や大日如来は両脇にあつて然るべきだ。日本の禅宗だけは各派とも陛下を中心に祀つて居る。そして一日と十五日にはどんな小寺や庵寺でも一山総出頭で『皇風永く仰ぎ、帝道ていどう仮かに昌はんんならんことを』と誦して居る。日本の仏教は悉く本尊様を天皇陛下にしなくてはならぬ。

(杉本五郎『大義』平凡社、昭和十三年、一九頁・一七八、一七九頁・一六七頁・一六〇、一六一頁)

これは、軍人側の言葉です。彼に言わせれば、まず、無我の境地、坐禅、禅の修行によつて無我の境地に到達すること

ができる。ゆえに、禅そのままが皇軍の眞の精神であると。わが禅宗は、少なくとも、この一部の軍人によつて、そういうふうになつてゐた。

これは、軍人が勝手に禅を解釈したんだ、これは決して禅の指導的立場にある人たちの考え方ではない、と考える人もいますが、しかし実際、この杉本五郎は、山崎益洲仏通寺派管長の弟子で、その山崎益洲は、ここでは省略しますが、とにかく非常に杉本五郎をどこまでも、彼に言わせると、杉本五郎の悟りの境地は、他の臨済宗の諸派の管長に負けないくらい素晴らしいものであった。特に、杉本五郎は早い時期に戦死するけれども、一九三七年、だからこそ軍神になりませんが、とにかく彼は、立つたままで死んだわけです。立つたままで、坐脱立亡ですが、とにかく、立つたままで死んだから、これこそ禅定力の現れであると、そういうふうに表示している。

ところでここは、駒澤だから、曹洞宗ですね。じゃあ、曹洞宗のお師家さんは、偉い方々は、この杉本五郎をどのようになら評価したでしょうか。次は沢木興道老師のお話を聞きましょう。

死に切つて働く

これを言葉を変えて言うて見ると、ただ我が身をも心をも、その事の如何を問はず、上長の命令に服従し、これに従ひもて

『禅と戦争』から考へる(ヴィクトリア)

行く時、直に陛下の股肱として完全なる兵隊になる。死ねば靖国神社に祭られる。それを『聖人に己れなし、己れならざるところなし』と言ふ。天地同根、万物一体。さう云ふところをよく体得して、つまりこの五尺の身体だけが我がものではなく、この我がもの、この五尺の身体を超越して、この五尺の身体で以て、天地同根、万物一体の理を体得をする。つまり言ふと、この五尺の身体で宇宙の眞理を体得し、この五尺の身体で神仏と一体になる。だから、涅槃経には悉有仏性と言ひ、阿含経には無我と云ふ。これを観音経には念彼観音力と言ひ、杉本中佐はこれを念彼天皇力と言ふ。かの天皇の力を念ずれば、生死を離れ、幸不幸を超越して戦をする。

昔鎌法師は刑に臨んで、『五蘊本来空、頭をもつて白刃に臨む。猶ほ春風を斬るが如し』と言つたが、これみな天地同根、万物一体と云ふことを体得したからである。五蘊本来空である。我れと云ふものが本当にあるのではないと云ふ、この無私の体得である。また無我であるから、諸法実相の体得となる。これを我が日本の軍隊にすれば、軍旗の下に水火も厭はん。軍旗の下に命も物の数ではないと云ふ、その境地である。衲はそれで、念彼軍旗力と云ふ。この軍旗の下に身を捨てる。これは実に無我である。又これが職域では、どの職でも職域奉公となる。

どの職でも念彼天皇力。念彼観音力。この意味を体得すれば、どの職務にあつても、どの仕事をしても、みなこれ職域奉公と

『禪と戦争』から考える(ヴィクトリア)

なる。即ちみなこれ生死透脱でなければならぬ。〔中略〕

袖のある至誠寮の部屋が四畳である。死場と云ふのは実に愉快でたまらん。日露戦争で負傷した首山堡の写真を額に掲げて、ここで死んで戦時下に働いて居る。この死んだ力こそ本当に滅私奉公であり、それこそ八紘一字であり、共存共栄である。真の力はこの死に切つて働くところから出る。そして、これこそ我々の生死透脱である。

『我れと云ふ小さいものを捨てて見よ、三千世界我が身なりけり』これこそ八紘為宇の境界でなければならぬ。

(沢木興道「生死のあきらめ方」『大法輪』昭和一九年五月号、六―七頁)

これは正伝の仏法でしょうか。沢木興道老師は、大法輪閣でいまだにベストセラーになっておられるようですが、この「念彼軍旗力」、それは、沢木興道老師の有名な言葉なんですけれども、「これは実に無我である」と、沢木興道老師はこう主張したんですね。

いかがですか。これが無我の境地ですか。「念彼天皇力」「念彼観音力」、これは全部無我の境地であると、沢木興道老師はおっしゃっている。

仏教界には、不殺生戒たるものがあるじゃないですか。一切衆生を殺してはならぬという、仏教にはそういう戒律があるじゃないですか。沢木興道老師は不殺生戒について戦時中

これをどのようにとらえたか。

不殺生戒

己れの命を捨てることは、鴻毛の如く、人の命を哀れむことは、己れの如く。ここに人と己れとの境目の尽きたところが、初めて不殺生戒なのである。だから、法華經の『三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は實に是れ我が子なり』ここから出発すれば、一切のものは、敵も味方も吾が子、上官も我が有、部下も我が有、日本も我が有、世界も我が有、その我が有の世界の中で、秩序を乱すものを征伐するのが即ち正義の戦さである。ここに殺しても、殺さんでも不殺生戒。この不殺生戒は剣を揮ふ。この不殺生戒は爆弾を投げる。だから、この不殺生戒と云ふものを参究しなければならぬ。

(沢木興道「禪戒本義を語る(九)」『大法輪』昭和一七年一月号、一〇七頁)

どうでしょう。「この不殺生戒は、爆弾を投げる」。人が投げるんじゃなくて、不殺生戒が爆弾を投げる。ありつるでしょうか。これが無我の境地ですか。

ある人に言わせれば、坐禅さえすれば、そのうちにわかる、と。私、永平寺でいろんな疑問があったとき、坐禅が足りない、とよく言われた。ところが、沢木興道老師は、坐禅が足りなかったのですか。沢木興道老師は、そんなに坐禅しなかった方ですか。

ここにひとつの大きな問題があります。あれだけ坐禅をした、あれだけのお師家さんが、平気で「不殺生戒は、爆弾を投げる」と言えるわけです。そして、今日に至るまでほとんど批判されずに、沢木興道老師はあいかわらず非常に尊敬されておられると思います。

ここまではいちおう、ほんの一部の、軍人が禅に対して何を求めてきたか、また、禅者たちは、どういう反応を示したかでした。

次はですね、軍自体はどのようにして禅を評価したでしょう。これは、一九四一年、昭和十六年の一月、いわゆる真珠湾攻撃以前の段階で、「戦陣訓」という、最も強烈、ある人と言わせると狂信主義的な文書が発表された。これは一応、東条英機の名前のものですけれども、実際に編集したのは今村均大将です。実は、今村大将とこの大学の学長の大森禅戒は大変に親しい間柄だった。その影響は、明らかにあるけれども、ここではそれを省略しますが。

その「戦陣訓」は、発表されると、それは精神教育の一環として、その軍の教育部、教育総監部が、この「戦陣訓」の死生観、生死観を説明しなければならなかった。その精神教育で、部隊長が、兵隊たちに、その「戦陣訓」の精神を説明するために、説明の文章を配ったわけです。この文章の中から

ら、軍側が、どのようにして禅宗を捉えているか。

第四節 死生一如

軍紀の真価は弾丸の下に於て初めて發揮せらるべく、其の根本の一は、將兵の死生観である。死生に超越して従容たるものにして初めてよく其の職責を全うし、軍紀従て嚴なるを得るは当然である。

勅諭に「義は山岳よりも重く、死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ」と御示し遊ばさるは即ち皇軍將士の死生観を論させ給ひしものと拝察すべく、日夜修養せざるべからざる境地である。即ち重んずべきは義にして生命にあらず。身は死すとも国家的永遠の生命に生くる死生一如の境涯を以て理想とせねばならぬ。

〔中略〕此武士的精神を思想、信仰上に基礎づけしものは、禅宗であった。

禅宗は極楽往生の思想を打破し、即心成仏を唱へ、自力主義を叫び、徒らに西方十万億土に憧れてゐた人々をして、直ちに脚下に注意せしめ、自己本来の面目を反省せしめたのである。即ち禅宗に於ては自己の尊嚴自己の力を高調し、自己以外に神あり、仏あり、極楽あり、地獄ありとなすは、すべて妄想なりと断じたのであつて、武士が死を恐れず平然として死生の巷に出入せしは元より実戰場裡に自然に得たる所なりとは謂へ、此の如き禅宗教義の感化に因ることも亦多いの

『禪と戦争』から考える(ヴィクトリア)

である。(中略)

此の死生観は、皇軍使命の崇高偉大なるによって、其遂行の爲生命を捧げて悔なからしめ、以て弾丸雨飛の下至敵の軍紀を維持する一要因たるものである。

(第八篇第二章皇軍軍紀の精神的要素「教育総監部編『精神教

育資料 第二輯』偕行社、昭和一六年、六七五―六七九頁)

これはまた見事な文章ですね。いわゆる浄土宗はためたと。極楽往生はだめ。わが禅宗こそ、ですね。自己本来の面目、自力主義、だからこそ禅はこの皇軍の基礎でなければなりません。だからこれが、軍人だけじゃなくて、軍そのものが、「戦陣訓」という文章を書いた。

「戦陣訓」の一番有名な言葉は、「生きて虜囚の辱めを受けず」、その文章、その言葉だけで、何十万、何百万の日本の青年たちが死ななければならなかった。

その由来は禅宗にあり！

禅宗の方々は恥を知れ！！

あんまり興奮してはいかんけど、長年これを研究しているけど、研究すればするほど、わが禅宗はそういう罪があるということ、本当に許すべきではない。

こんどもまた、勝手に解釈してると言えるでしょうけれども、じゃあ、今のアメリカで、欧州、日本でも、最も著名な学者の一人、鈴木大拙がいいますね。今でもこれは、日本の思

想家を代表する鈴木大拙、というくらいに言われている。じゃあ、鈴木大拙は、この日本人の死生観をどのように評価したか。

これは、戦時中の言葉で、一九四二年に発表している。

日本人の死生観

日本人の死生観は禅で培はれたと云ってよい。

日本人と云っても、その中には色々の段階があるが、その何を以て最も日本的であるかと云ふと、自分はそれを武士階級と断言したい。兎に角、此階級が作り上げた文化精神は実に日本人の各層に対して指導的優越性をもつて居る。武士精神は日本人を代表して居ると云ってよい。此精神がその純粹性において今日の日本人の各層にも 官吏と云はず軍人と云はず実業家と云はず知識人と云はず何れの層にも 浸潤して行けば、今日吾等を煩はして居る多くの問題は刃を迎へて解けると信ずる。勿論、此精神を土台にして思想的建設がなくてはならぬが。

それはそれとして、武士精神の特性と見るべきものの中で重要なのは、直截性(これは清明心に通ふ)である。一旦目的が確立すると、それに向つて、利害得失を超越して奮進するのが、直截性である。さうして此直截性がまた禅の著しき性格である。禅は単刀直入的である。「仏とは何か」と問へば、「貴様何と云ふか」と云つて一棒を与へる。「生死の問題で困つて居ます」と云へば、「この馬鹿奴、どこに生死など云ふものがあるか」と云

って、相手の胸倉を把って室外へはふり出す。わかるわからぬは別問題として、これほど直截な宗旨の取扱ひは、世界のどこへ行っても出くはさないのである。武士は無学であっても

或はさうであったので、禅のこの直截性が気に入った。北条時代の関東武士は、京都の雲の上人のやうに優長性を持たぬ、学問を好まぬ。武士はいつも生死の間に出入して居る。わが家の敷居を跨いで出れば、或は出なくても、いつも死に当面して居る。くづくづするひまはない。彼等にとつては禅は詭向きの宗教である。

〔中略〕禅の死生観が日本人の死生観である。

『科学文化』第一卷第三号、昭和一七年、鈴木大拙全集第二九卷三三丁三七頁

「禅の死生観が日本人の死生観である」と。ともかく、禅者は直感を重んずる。何を考へてもよろしい。無心、無念、無想、こつこつ言葉は、禅寺においては毎日のように聞かれます。

原田祖岳老師は、みなさん、ご存じの方もいらつしやると思いますが、原田祖岳の有名な言葉で、次の言葉があります。

「進め、トツトツトツ、撃て、パチパチパチ。是は之れ、無上菩提の露堂々」(「戦禅一道」『大乘禅』昭和一四年一月号、市川白弦『日本ファシズム下の宗教』一九七頁)。これが無上菩提

『禅と戦争』から考へる(ヴィクトリア)

であり、戦禅一如の世界であります。何も考へる必要はない。言われたとおりに行動すれば、それが無上菩提、釈尊と同じ境地である、原田祖岳、または、その門下の安谷白雲などは、しよつちゆう、戦時中にこの言葉を述べた。鈴木大拙もその一環である。

ところが、鈴木大拙は、ただ単に学者で、実践家ではない、それほど坐禅したわけではない、という人もおりましようが、じゃあ、熊沢泰禅老師はどうでしょう。永平寺の眞首、実は、熊沢禪師は、非常に長生きされた方で、私が永平寺にいたとき、あの方の指導を受けたことがあります。この戦時中の熊沢泰禅の死生観、生死観はどのようなものでしょうか。

大非常時の今日、国民として覚悟を要することは多々あるが、中に就て最も大切なことを、世人多くは等閑に附してゐるのは何たることであるか。何を捨てて置いて、人間先づ第一に覚悟を要するは生死到来の場合に処して、その覚悟如何である。

〔中略〕

生死の問題は、我が宗の安心として、平生から常に説き尽され、教へ尽くされてを。即ち道元禪師は、

生を明め死を明むるは仏家一大事の因縁なり。

と曹洞宗安心の『修証義』の巻頭第一にも御示し下さつてを。

『一大事因縁』とは一大問題と見るが好い。この生死問題こそ実に仏教の大問題であると共に、人生問題の解決点である。故に

『禪と戦争』から考える(ウイクトリア)

道元禪師は極めて御親切に御示し下さって『正法眼蔵』の中に『生死』の巻の一篇がある。極めて短かいが実に有難い御文である。(中略)

衲は今まで敦賀の永建寺に三十四年も住職してゐたが、敦賀には聯隊があつて、前後十五年もその軍隊布教師として常に行つてゐた。従つて寺の方へも軍人諸君が能く參禪に來られて常に提擲した。殊にこの生死問題に対しては『軍隊内務書』の開巻第一の条項にも、

兵官は艱苦を共にし生死を共にし生死を同ぶする、軍人の家庭にして云々

とある。軍隊に於ては、生死超脱を以て教育の第一義としてゐる。近くは『戦陣訓』にも、本訓其の二の第七に軍人の死生観として、

生死を貴くものは崇高なる献身奉公の精神なり。

生死を超越し、一意任務の完遂に邁進すべし。

身心一切の力を尽くし、従容として悠久の大業に生くることを悦びとすべし。

と親切に示されてゐる。軍人精神の發揚と共に、如何に生死を超越すべきかを解説せられたのである。国民皆兵の今日、この『戦陣訓』は實に軍人のみならず、実に一億国民の大教訓である。(中略)

今や敵米は機械化部隊を動員して我が本土に逼らんとしてをる。

正に是れ『生死到来、如何が迴避せん』と實際問題ではないか。歴史に輝く日本国民、その祖先を辱めざるよう、この時こそ滅私奉公、大に努力せねばならぬ。日本男児として御国のために尽すと共に、その死処を得ねばならぬ、その死処は何れの処にある。必ずしも戦場に行くのみとも限らない。近く人々の脚眼下にある。それを能く照顧して、自分自分の本分を知つて、至誠以て業を励み、職域奉公、天賦の生命を全うする。ここが謂ゆる死処である。換言すれば、生を全うしたる所が即ち死処であると同時に、死を全うしたる所が即ち生である。生と死とは決して別物ではない。(中略)

一億一心、悉く献身奉公、日本国民としての面目を全うし、この非常時に対して毅然として奮闘せねばならぬ。ここに最も禅的信仰、修養が大切である。この禅的公案に參じ來つて、日本を護り、大東亜興隆の責務責務を全うせねばならぬ。

(『生死到来如何が迴避せん』『大法輪』

昭和一九年五月号、九一二頁)

いかがですか。これは、禪師が言つ、もつとも禅的な信仰であるかどうか。しかもこの方に言わせると、『戦陣訓』は禅の力、禪宗はただ単に軍人にだけじゃなくて、一切の国民はこついつ心構えを持たなければならぬ、しかも、この時代になりなると、本土決戦は目の前にあつた。別のところで、彼はそれを認識してゐる。彼はいわく、あの当時は、日本の女

性たちは、一人一人が竹槍を与えられた。竹槍訓練を今やっている、これは非常に結構なことだ。

考えてください。あの原爆は、あれほど非人間的なものはない、しかも、私の国がそれを落とした。本当にアメリカ人の一人一人が恥を知るべきだと、はつきり言います。

同時に、アメリカの戦車隊に対して、女性たちに竹槍を与えて、突っ込んでこい、それが禅だ、それが仏教の精神だというのも、日本の、特に禅宗、こういふような禅者があいつことを平気で言えるということは、犯罪的行為です。と、私は思っている。大いにあとで反論してください。どういふふうに解釈しているか。

それでは、これらは軍人を中心に語った言葉でしたが、もう一つ、軍人の遺族たちですね。戦争が激しくなりまして、戦死して遺族がどんどんどんどん増えてきた。その遺族に対して、わが禅宗はどのようにして遺族たちを慰めたでしょうか。今度は、この駒澤大学の学長、山田豊林先生の、私は実は、『正法眼蔵』を山田豊林先生から学びましたが、その戦時中の山田豊林先生の言葉を聞いてみましょう。

英霊は此の国土に

英霊の正体は忠勇義烈なる善業力そのものである、火の玉のやうに熟しきつた善業力そのものである。これが無くなることは

『禅と戦争』から考える（ヴィクトリア）

あり得ない。英霊は英霊自身その力によって、食物や氣息をその中に巻き込み得る因縁の純熟を俟って、肉体を具へて現はれること必定である。

〔中略〕この業力の生み出す身や心が、今のものと変えることはあり得ない、といふ意味を述べていられる。〔中略〕

忠勇義烈な将兵が天皇陛下の万歳を唱へて絶命する、この将兵の英霊が、日本の此の国土に生れることは、当然過ぎるほど当然だといはねばならぬ。

〔禅学夜話 第一書房、昭和十七年、五三―五四頁〕

この、遺族に対して、あなたは息子とか夫とか亡くしたけれども、悲しむことはありませんよ、その人の善業力、その業報としていいことをしてきたから、彼は必ず、ただ生まれ変わるだけじゃなくて、この日本に生まれ変わるんだと。だから、赤ちゃんが産まれると、あなたの主人と思えばよろしい。何も悲しむことはありません。

いかがですか。それが仏教という業論ですか。それが業ですか。業の働き、戦場において亡くなったら、その素晴らしい行為によって必ず自分の国でまた生まれ変わると。

そういう業論がありますか。仏教に。山田豊林は、いまだに非常に高く評価されていると思いますが。

業論と非常に近い、因縁論がございしますが、ここでは、禅の方じゃなくて、浄土宗系の友松円諦、非常に有名な学者が

おられました、彼はですね、この遺族に対して、仏教の言葉、仏教の教理をどのように説明したでしょうか。

因縁

日本人は、ながい仏教の感化によって、因縁の哲学を肚の底までうけとつてゐる。いちど、日本人の口から「因縁」といふ言葉が出たら最後、一つの安定をえるのである。縁談にしてからが、結納の日がきまるまでは、長い、短い、いいの、わるいのと、内輪でさへ仲々きまらぬものであるが、ひとたび、きまつてしまふと、すべては「因縁」になつてしまふ。長いのも因縁、短いのもいんねん、いいも、わるいも、みな一網打尽に、いんねんの中につつまれてしまふのである。一つのもも偶然のものはないとのうけとり方である。戦死をしたといふこと、早くして未亡人になつたといふこと、父の顔をさへ知らぬ孤児になつたといふこと、偶然といへば、偶然かもしれない。然し、敵方からとんできた一発の弾丸といへども偶然のもではない。必ず、そこに一つの因縁があつたのである。その弾丸の雨飛する中に、突き立つたのも因縁である。当らうと思つても当らぬときにはあたらす、当りさうにもない弾丸でも、あたるべきときには当らずにはゐないのである。決して、うちの主人だけがいくつてうち出されたものではない。さうした個人の愛憎をのりこえて、主人はただ、一つの因縁に、死ぬべく死んだのである。当りどころがわるかつたのだ。一寸、その瞬間、

右を向いたのがわるかつたのだ。然し、それはどうすることも出来なかつたのだ。左を向いたから、必ず、当らなかつたとも言へない。必然性をもつた因縁によって主人は戦死したのである。いつてみれば、主人はそれだけの生命しかなかつたのである。落ちついた遺族の胸には、主人の戦死が、かうした筋目立つた因縁によつて行はれたことがうけとれるのである。誰もうらむことはない。誰がわるいでもない。誰にも責任があるのではない。ただ、いんねんで死んだのだ。

(『転迷開悟』遺族読本 陸軍恤兵部 昭和一六年、六九―七〇頁)

二―バーさんの言葉を思い出しますか。戦時中の宗教家は、大嘘つきになると。ここは、あれだけの人間が死んでいったのに、誰も悪い者ではない、仏教でいう因縁だと。裏を言えば、いわゆる、その夫とが、主人とが、前世において何か悪いことをした、だから、ああいふ戦場で死んでいった、と、それを言わんとしてるでしょ。本人が悪い。国家の為政者たちの政策が悪いんじゃない、本人が悪い。だから死んだと。それが仏教の因縁の思想だと。恐ろしい思想ですね。

じゃあ、一番最後に、また駒澤大学にもどりますが、いつたいこの戦争そのものを、後の仏教者たち、とくに駒沢にいらつしやる学者たちは、どのように仏教と戦争のことを説明したでしょうか。

林屋友次郎教授、この方は、戦時中、『仏教の戦争観』と

いう本を出して、仏教と戦争の関係をはっきりと書いています。

仏教の世界観に於ては、如何なるものにも自性が無いとしてゐる。それが仏教哲学の根柢であつて、同じ意味から、戦争にもその自性を認めることが出来ない。その戦争がどんな戦争であつても、戦争そのものとして善いとか悪いとかいふ自性を持つてゐないのである。「中略」

仏教が戦争を悪いとも善いとも定めないといふのは、形の上の戦争を見ないで、その目的を問題にするのである。そして、善い目的を持つ戦争ならば善いとし、悪い目的を持つ戦争をば悪いとする。仏教は仏教の心に叶つた戦争を是認するばかりではない。もつと積極的に動く時は、仏教自身が戦争主義者でさへもあるのである。『大般若理趣分』にも、

たとひ三界所撰の一切の有情を殺害するも、これに依て地獄に墮ちず。

とある位である。慈悲の宗教ともある仏教が、どんな理由からにせよ、戦争の必要を積極的に認めるといふことは、甚だしい矛盾とも暴露とも考へられるかもしれないが、それはまだ仏教に於ける慈悲の反面を知つて他の一面を知らないものと云はなければならぬ。仏教が真に理解されてゐないのである。

〔中略〕仏教の戦争はどこまでも手段としての戦争である。目的は衆生の救済、衆生を正しく導くといふことにあつて、如

『禅と戦争』から考へる（ウィクトリア）

来の徳を理解出来ない人間に心眼を開いてやる手段として金輪聖王が戦争を起すのである。それであるから、金輪聖王の働きとして現れる戦争は、利益の戦争でなく、権力の争ひではなく、徳を布く準備工作としての戦争である。

〔中略〕日本仏教が天皇を目して金輪聖王とすといふことは、天皇が俗界の如来であることを意味するのであるが、……

要するに、国家を殺す戦争は許されないが、国家が国家を生かす戦争は許されるのである。戦争には莫大な戦費も要すれば、貴重な人命も多数失はなければならない。その金も人命も国家にとつて重要であることは云ふまでもない。然し、国家にとつて金よりも人命よりも重いのは、国家そのものの明朗堅実な存続といふことである。「中略」国家を生かす上に必要な戦争であるならば、猶予なく最善の戦争を戦ふべきである。……

世界人類の智慧が高まれば、戦争の起る原因がなくなるために戦争もないのである。人類が戦争をやめることの出来ない事情にある時は、我をも敵をも生かす慈悲の戦争をやるより仕方がない。慈悲の戦争に依て交戦国相互も共に向上し、戦争が戦争を駆逐して行くのである。

『仏教の戦争観』大東出版社、昭和二年、一〇—一九頁、

二二—二七頁、四六—四七頁、一〇五頁）

「慈悲」の戦争がありますか。仏教自身が戦争主義者だと、駒澤大学の教授が当時の学生諸君に説明されたわけですね。

それで戦場に送り出した。この駒澤大学にも責任がありますね。若い学生諸君に、ああいつことを平気で言って、それで旗を振って戦場へ送り出した。それが駒澤大学です。駒澤大学の教授です。

こういう、いい目的の戦争であれば全然問題がないと。だから日本が、中国で、一千万から二千万人の中国人を殺したと推定される、それは、慈悲の戦争であったと。そういうふうに当時の仏教学者が、熊沢泰禅、山田豊林などが、説明したんですね。

私なぜこの文を読んでもらったかというと、私のほうでどんどんお話ししていくと、すでに私の本の批評としては、「いや、あの当時の老師方は決してあのようなことは述べなかつた」と、すでにそういう反論が出ている。だから、これで、言わなかつたとな誰が言えるか。

これらはほんの氷山の一角です。膨大な資料に基づいた、これはほんの一部です。

問題は、わが禅宗とは、殺人を嫌わない宗なんですか。

もしも私がそれを信じたならば、もうすぐにキリスト教に戻ったかもしれません。無神論者になつたかもしれません。しかし、私はそれでも仏教徒だと。それでも曹洞宗に属している。なぜでしょうか。こつこつ事実を知りながらも、なぜ

私はそれでもなお仏教徒と自称するのでしょうか。

一つのヒントとしては、アメリカで有名なロバート・ペラー教授がありますが、このペラー教授は、『徳川の宗教』という本を出して、最後にちよつとだけこの問題について触れたことがありますから、紹介したいと思います。

宗教は俗世界を越えたところの心理を説こうとしますが、結局はその超えようとしている世界に巻き込まれてしまいます。どの宗教も世の中を自分達の理想とするところに作りかえようとするのですが、残念ながら逆にその現実の世界に存在する価値観に毒されてしまいます。これは宗教の持つ悲劇です。宗教は人間を超えようしますが、実はあまりにも人間ほいものなのです。ところが、宗教に関する限り、それが悲劇という言葉だけがかたづけられるものではありません。と同時に、一九四五年が日本の宗教の終局を意味しているわけでもありません。宗教家が自分の理想に対する信念を堅持する限り、すなわち宗教が宗教として残る限り、宗教と社会の対決は続くでしょう。そして宗教に対する信念は宗教家の人間としての敗北を反省し、改革するきっかけとなるでしょう。

ロバート・ペラー『徳川の宗教』より
ですから、私はまだ仏教徒、曹洞宗に属している理由は、ここにあるわけです。改善のきっかけとなればよろしい。我々は、過去を変えることはできません。未来しか変えるこ

とはできない。未来しかない。今の次の瞬間。

ここでの問題は、あの方々は駄目だと、そういうことではない。もちろん、沢木興道老師にしても、いい面はたくさんある。全部駄目ではない。しかし、駄目な面もあったということをお我々は自覚しなければならぬ。そして、我々自身はどうだと。我々自身にも駄目な面はないかと、私をはじめとして、皆一人一人、駄目な面があります。しかし、仏教徒である限りは、この駄目な面を我々自身が許してはならない。少しでも正しい仏教の方向に行かなければならない。

私に言わせれば、いふなればこの方々は素晴らしい反面教師の面を持っている。いまだに多くの回教徒、キリスト教徒は、自分の宗教はあれほど罪深いものだと思覚しておりません。ゆえに聖戦が続いているわけです。誰がそれをうち破るか。私はあなたがたに大変期待しています。あなたがたも、私も、少しでもこの問題に目覚めてきて、我々の先祖、我々の禅宗がこういうことをやってきたことを、我々は二度と繰り返さない、過ちを繰り返さないだけじゃなくて、我々はこれから積極的に本當の仏教の論理のもとで、行動する、と、そういう期待で私は今日の話をしているのです。

じゃあ、具体的にどう仏教、禅宗、曹洞宗を改善していくか。これはみなさん、大変な問題です。簡単なことではない。幸いにして、駒澤大学においては、批判仏教の方々がすでにこ

『禅と戦争』から考える(ヴィクトリア)

ういう問題に手をつけているわけです。私はそれを、ここで高く評価したいと思います。

私は、実は花園大学に一年ばかり、客員研究員としておりました。彼らを悪く言いたくないけれど、特に、河野大通老師、その時は学長でした、河野大通老師はこの問題に非常に関心があった。ところが、あとの臨済宗の方は、本當に無自覚。少なくともわが曹洞宗は、戦争の懺悔文を出した。それを評価したい。(補注)

ところが、それだけでは問題が片づいたわけではない。なぜならば、教理的なところ、無我とは何か、業論、それには部落差別をはじめいろんな問題が山ほどあるのであって、決して、ああ、我々は悪かった、それで問題は片づけたと、もし曹洞宗の方々がそう思っているのなら、それはこの問題を将来においてもう一度繰り返すことになるきつかけともなる。過去は悪かった。はい、じゃあまたやりましょう、と。そうじゃなくて、駒澤大学こそ、批判仏教の諸先生がいらっしやるからこそ、少なくともこの問題を真剣にとらえているということ、それは本當に偉い。我々一人一人もそれに参加するとか応援するとか、それが我々の義務だと私は思っています。仏教徒として。

その意味合いにおいて、いくつかのことをみなさんに提案したい。

一つは、禪は、国家と一体になれる、無我の境地は国家と一体に、天皇陛下と一体になれる。じゃあ、この国家たるものは仏教からみた場合はどういふものですか。私に言わせれば、国家とは、集団工口です。それは確かに、一人一人はきれいにみえるけれども、しかし、基本的には、集団工口です。だから仏教徒はいかなる国とも一体になりません。仏教徒は集団工口をめざすことはあり得ない。あつてはならない。

あなたがたはもう日本人ではありません。仏教徒ならば。じゃあ、あなたがたは何かという、在日仏教徒。私は、来週になると、在オーストラリア仏教徒。仏教がまず先。どこにいるかは二の次。それが極めて重要な自覚と思えますが、どうでしょう。あとは全部忘れていい。私は今日から在日仏教徒であると、そういう自覚さえあれば、変わると思いません。

それでは、無我とはどうですか。彼らの言う無我は、本当の仏教の無我とは私は思わない。なぜならば、これはちょっと理屈っぽいけれど、本来のサンスクリット語では、無我はアン・アートマン。アートマンは、永久なる魂、それがないと釈尊はおっしゃった。ないと言ったけれども、我は仮に存在していないとは釈尊は言っていない。我は実は仮にしばらくの間存在している、ただし、永遠に存在するものではない。

これは『法句経』の言葉です。

ものみな なべて 暴力に 怯え
ものみな なべて 死を 怖る

おのが身に 思い くらべて

殺す なかれ 殺さしむる なかれ

ものみな なべて 暴力に 怯え

すべてのものに 命 いとおし

おのが身に 思い くらべて

殺す なかれ 殺さしむる なかれ

(三枝充憲訳『タンマバダ・法句経』青土社 一九八九年、九九頁)
相手も自分と同じ人間だ。同じように死を恐れている。だから殺してはならない。相手は無我だから殺していいと、釈尊はどこにも言っていない。

じゃあ、沢庵禅師はこれをどうとらえたでしょう。彼は『不動智神妙録』のなかでこういう説明をしているわけです。

あなたの兵法にあてていえば、太刀を持つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて、打つて人を切れ、人に心を置くな、人も空、我も空、打つ太刀も空、その空にも心を取られてはならぬ。鎌倉の無学禅師は、かつて中国にあつた時、大唐の乱に元兵に捕えられ、まさに斬られようとする時、「電光影裏に春風を斬る」という偈を詠んだところ、元兵は刀を捨てて逃げたという。禅師の心は、太刀をひらりと振り上げたのは、稲妻がピカッと光

る瞬間のこと、そこには何の心も念もない、打つ刀に心はなく、切る人にも切られる我にも心はない、切る人も空、太刀も空、切られる我も空ゆえに、打つ人も人でなく、打つ太刀も太刀でなく、打たれる我も稲妻のピカリとする間に、空を吹く春風を切るように、何ものにも止まらぬ心である。

(市川白弦『日本の禅語録第十三巻 沢庵』講談社、

一九七八年、二二七～二二八頁)

私が強く言いたいことは、沢庵禅師ほど仏法を誹謗している人は、この世にはおりません。本当に罪深い人です。

自分も空、相手も空、だから殺すのは何の問題もありません。『法句経』の言葉と、沢庵禅師の言葉を比べてご覧下さい。同じ仏教ですか。ありえないでしょう。どっちが仏教ですか。

あれは禅宗の考え方で、仏教の考え方はありません。そういう考え方は成り立つと思います。しかし、それを探る禅宗の方がいらつしやるとしたら、もう仏教という名前をやめなさい。仏教じゃない。

勝手に「禅宗」の人たちが考えているだけだ。そういうふうにああいう信念、こつうい言葉を持っているのならば、仏法を誹謗しているから、すぐさま仏教の教団から追い出すべきだ。

なぜこつういことになったか。実は、複雑な理由はない。

『禅と戦争』から考える(ヴィクトリア)

日本においては、中国においてもそうですが、いつも権力者側と禅宗は結びつけられたでしょう。北条時宗の時代から、護国仏教、禅宗以前にも護国仏教は存在しますが、禅宗の方々は、北条時宗に、禅定力をどうぞお使い下さい、人殺しのために、お国を護るためにお使い下さい。しかも、北条時宗に禅定力をお使い下さいと言ったのは、日本の禅宗のお坊さんではありません。中国禅宗のお坊さんだった。だからこれは決して日本の禅宗だけの問題ではない。

じゃあ、釈尊と比べてご覧下さい。みなさんも存じのよううに、釈尊だって、一回戦争を止めたでしょう。ロンギ川の水をどう分かち合うか、釈尊はその間に入って、戦争を止めた。二回目は釈尊はどうしましたか。また隣の国が彼の国を攻めてきたとき、釈尊は、これでは私はどんなことをしようとも戦争を止めることはできません。それで彼の国は滅亡した。じゃあ、日本みたいに、釈尊は僧兵を作りましたか。天台宗、比叡山では大いに僧兵を作ったんですね。これは全部仏法を護るためです。しかし、比叡山のはたことは、仏法を護るためではなく、自分達の権力を護るために僧兵を作ったんです。

結局、仏教者は、とにかく国家と一切手を切らねばなりません。仏教者は、仏教の理想だけでいい。その基本的姿勢は、決して人間を殺しません。

この人たちは、ほんとうに詭弁のような理屈をつけたでしよう。慈悲の戦争ならばよろしい。どこに慈悲の戦争があるんですか。ありません。

だから、仏教たるものは、いろんな戒律があるけれども、私は、少なくとも一番大事な戒律は、不殺生戒だと思います。もし仏教者たる者、不殺生戒さえ守れば、仏教は世界の他の宗教と全然離れることになりません。

しかし、現在においても、じゃあ、スリランカに行つてらん、そこに上座部仏教の方がおられるけど、じゃあスリランカで聖戦はありませんか。それはちゃんとある。そこでシンハラ族は、仏法を護るためにタミル族を殺している。

仏教の聖戦は日本で終わったわけではありません。ダライ・ラマ十四世は、一九六〇年代に、アメリカのCIAと一緒に、そこでゲリラ戦を開始した。そして、ダライ・ラマに、どうしてああいうことをしたんですかと、テレビ局の人がインタビュで聞いた。ダライ・ラマいわく、仏教の基本的教理は、もしも動機が正しければ、目的が正しければ、手段として暴力を使つても構いません。ダライ・ラマは、はっきりと、テレビで、英語で言いました。だから決してこれは過去の問題ではありません。我々仏教徒は、そういう発言を許すか、反対するか。

自分の国家は、アメリカをはじめとして、また戦争をやる

に違いない。ところがこの次は、日米安保条約のもので、アメリカだけではちよつと足りないから、日本に応援してくれと。すでに湾岸戦争でそう言われた。ゆえに、日本においては、今、憲法第九条を改正していこうとしている。いいですか、この世界の中で、唯一戦争を放棄したのは日本。確かにそれは、アメリカが押しつけた概念。しかし、押しつけられたからといって、それが悪いとは思いません。仏教的にみて。

戦争をやつて、どこにいいことがありますか。少なくとも、仏教徒として、日本という国がなくなつたら、ではないでしょう。釈尊は、目の前で自分の国の滅亡をみた。彼の弟子達は何千人もいたでしょう。それで僧兵を作ることまでできたでしょう。我々は釈尊の弟子であるゆえに、釈尊の本当の行動、声を、我々は手本としなければならぬ。

だから、国というものは、五千年前に日本という国があつたか、ない。五千年後に日本という国があると思ひますが、ない。一時的な現象。ただし、一切衆生は五千年前にあつたし、五千年後もあるでしょう。原爆で人間は自滅するかも知れませんが、とにかく我々仏教徒としては、あるであらうために奮起しなければならぬ。一切衆生の我々の役目である。

国、国家は、本當に仏教を駄目にしてしまつた。過去のこ

とはそれは仕方がない。朱に交われは赤くなると日本ではよく言つた。武士階級と一体になれば、あのような沢庵禅師の言葉が出てくる。しかし、幸いにして、武士階級は日本には存在しない。だから、彼らのご機嫌を取る必要はない。

我々仏教徒は、歴史上初めて自立して、自分たちの理想が何であるかということをはっきりと定めた上で前進するのみ。定めるのは決して容易ではない。大いに討論して、大いにいろんな意見を交換して、それで何かに向かつていこうではありませんか。

これでもって私の話を終わりにいたします。

〈質疑応答〉

〔質問〕 先生のご主旨について、禅というのは教理的に戦争を肯定する内容を有していると、根本的なところで戦争を肯定する、人殺しを肯定する教義を持っている、というご意見ではけつしてないですよ。それが、国家的な意識、あるいは全体主義的な志向というものを持つことによつて、その教理を自己保身、あるいは方便として曲解するという方向が生じてきているというところにおいて、それを捨てるべきだ、というご意見と何つてよろしいのでしょうか。あるいは、根本的、教理的にそれを容認することがある、とお考えになつていらつしやるのでしょうか。戦時下における表現というも

の、つまり、宗教というものは大いなる嘘つきになるというその嘘というものが、教理に対しての嘘であるのか、人の対しての嘘であるのかというところを、ちよつとお聞かせ下さい。

〔ヴィクトリア〕 そこは、難しいところですね。というのは、ここに『仏教解体』という、去年出てきた本です。そしてこの山根二郎さんという人は、弁護士なんですけれども彼は私と同じような問題を取り上げていますね。そして彼は、その結論から言えば、仏教は、戦時中あれだけの罪深いことをしたから、日本の仏教は駄目だ。だから、日本から仏教を排斥すべきだ、という結論。私は、仏教徒として、その結論は賛成できません。私は、今の時点で、釈尊の教えを、我々仏教徒はもう一度見直す必要があるんじゃないでしょうか。そこが、批判仏教の運動の一環であると思います。何が仏教の本当の言わんとしているところなのか。これは、まぢまぢの意見がありますよ。それはあつていい。

仏教は、神様がいないわけなんです。キリスト教の方は、いつもこういうことを言う。神様が聖書の中でこうおっしゃったから、だから正しい、と。ところが、キリスト教の人の面白いところは、時代と共に聖書の言葉を絶え間なく新しく解釈していくわけですね。

ところが、仏教徒は神様がいない。私に言わせれば、幸い

にして。そして、何がいいかというと、自分の頭、概念、知性、理性、釈尊は、人間に、大いに考えて、大いにこの頭を使って参究してご覧なさい。その理由は、一切衆生の幸せをもたらず、そういう結論に達したならば、前進、それに向かつて行けと。だから私は、それが仏教の本当の姿ならば、どれだけ素晴らしいかと。

今の日本の若者は、仏教のことを、あれは老人のためのもの、あれは葬式のためのもの。仏教はそうじゃない、若者のための宗教。いかに生きるかのための宗教。かといって、老人のための宗教でないわけではないけれど、本当に若者のための宗教。日本では葬式仏教になってしまった、何という悲しいこと。我々はもう一度若者としての仏教を取り戻さねばならない。だからまあ、あまり回答になりませんが、言わんとしているのは、これは仏教の本質でも、禅宗の本質でもない。

ただし、こういう反論が出てきた。あなたはそういうことを言うけれど、あなたは日本の戦時中はこの国にいなかった。どれだけの規制があったか、それがために、我々仏教徒は何ができたか、と。そういう考え方は、私ははっきりとインチキという。なぜインチキかというと、沢庵禅師の思想はすでにいくらでも批判ができてはいます。だが、批判されな

駒澤大学の学長、これは大正四年、一九一五年、日本がまだ戦争していないとき、この駒澤大学の学長は、秋野孝道さん、その当時はここは曹洞宗大学と言ってた。彼は、不殺生戒について、『禅の骨髄』という本の中で、こういふふうに書いているわけです。

「若し慈悲同情の心よりせば殺しても殺したには成らない」
「日本軍人として敵兵を止むなく殺すのも皆これ東洋の平和の為と云ふ慈悲同情の念からするのであるから殺生にはならぬ」(『禅の骨髄』丙午出版社、大正四年、八五頁)

これは、沢木興道老師と何の変わりもない。しかもこれは日本はまだ戦争、軍国主義以前の段階、その時点ですでに指導的立場にある仏教者たちは、こういふふうにご学生諸君に宣伝している、仏教はこういふもの、仏教の戒律はこういふもの。戦争になった時点では、彼は別に教理を変えようとなく、明治時代、またそれ以前、沢庵禅師の時代に出上った路線でただ促進したのみ。ですから、決してこれは軍国主義の時代だったから何もできなかったという問題ではない。その根は実は根深いものがあると。だから、ただ単に戦時においてはこうしてた、ではない。もっと突っ込んだ教理的な問題を掘り起こさない限り、私は真の解決にはならないと思っています。

〔質問〕 仏教徒は戦争に反対するということではないと思う

んですけれども、たとえばベトナム戦争なんかありまして、あれはベトナムの独立戦争、一種のアメリカの侵略に対する独立防衛戦争なんですけれども、もしベトナムの方が仏教徒だとしたら、防衛戦争だからそれは一種の正しい戦争であつて、仏教徒だからといって戦争しないのはおかしいんじゃないかと。日中戦争みたいなのは、完全に侵略戦争だから、それは反対してもいいと思いますけれども、それに対する反対の戦争も、やっぱり人殺しになりますけれども、それは正しいと思いますけれども、そのへんはどうなんでしょうか。仏教徒だったら、そういう防衛戦争もやらないのか、そのへんはどうなんでしょうか。

〔ヴィクトリア〕 これは極めて難しい。まあ、難しい面と難しくない面がある。

私はずっと、アメリカのベトナム侵略に反対してきた者として、仏教徒は侵略戦争に対しては反対するけれども、自衛の戦争のためならば、戦争を仏教徒はやると。しかし、それは一つの前提のもと、いわゆる正しい戦争と正しくない戦争が存在するという。私ははっきりとこれを俗世界の価値観と思っています。俗世界の価値観、いい目的ならばこれはよろしい、これは仏教も応援すべき。悪い目的のためならば、仏教徒は参加してはならない。

ところが、これはちよつとややこしい説明になりますけれ

『神と戦争』から考える(ヴィクトリア)

ど、じゃあ、北ベトナムは今勝つたわけでしょう。共産勢力が勝つた。その国においては宗教の自由がありますか。ありません。表現の自由がありますか。ありません。結社の自由がありますか。ありません。それは、共産主義、独裁政権です。中国も共産主義独裁政権です。それは決して仏教の求めている理想ではありません。はっきりと、ベトナム戦争は、アメリカの侵略です。かといって、じゃあ、あれに反対した勢力はすべてよし、ということではないですね。両方ともそれに自分の、ベトナム共産主義者は国家を乗っ取ろうとした。それに成功した。民族主義的な思想。

ある面では、仏教では両方が駄目だ。それは仏教の思想ではない。より悪い、それほど悪くない、仏教はいつも段階的に悪を判断するわけです。そういう意味合いにおいては、より悪だったのはアメリカ。ところが、じゃあ共産主義は、素晴らしいか。問題は国家なんですね。国家の為政者たちはいつもまずもって自分たちの利益を求め、それに反対する人たちを弾圧する。しかも共産主義者は、弾圧するということを素晴らしいことと思ひこんでいるわけですね。これは決して仏教の理想ではないですよ。

より良い、より悪い。おそらく私もベトナムにいたならば、解放戦線に加盟したかもしれません。

こつという話があります。ベトナム戦争で、アメリカが撤退

した。そこで、今度はサイゴンに北ベトナムの軍隊が入って来る。それで彼らが最初に何をしたか。仏教の旗を振って歓迎した仏教徒が大勢いた。あの仏教の旗は絶対使っちゃいかん。次はどうしたかというのと、大きな観音様があった、それを爆破した。なぜ爆破したかというのと、あれは傀儡政権が作った観音様だ、だから爆破しなければならぬ。そして、僧侶たちはそれにどういふふう反論したか。あなたがたは誰の車に乗ってこの町を走り回ってるんですか。あなたがたは傀儡政権の車に乗って走り回ってる。あなたがたは傀儡政権の車を使ってもいいけれど、我々仏教徒の観音様の仏像を破壊しなければならぬ。その道理はどこにあるんですか。その人はどうなったか。監獄にぶち込まれた。それで、何人かの僧侶たちは、有名な画像があった、アメリカの侵略に抗議するために焼身自殺したでしょ、それは今でもなお続いているわけです。決して私はそれを容認しませんけれども。

仏教徒はとにかく自分たちの理想は不殺生戒であり、相手が共産主義者であろうが、資本主義者であろうが、自分の一切衆生の中に入る。彼も、彼女も、生かさなければならぬのが、仏教徒だと私は思います。それは決して容易なことではない。人間感情として悪い人がいればその人を何とか片づけよう。私だってそこまで到達していません。しかし、それが仏教の理想であるということだけは私は自信が

あります。

〔質問〕 今日はいくさん禅者を名前を挙げて批判されましたわけでございますけれど、どのような基準というんですか、私たちがだいたい知っている方でしたけれども、その時代を生きていた人にはたくさん禅者がいたと思いますから、ある特定の人のある言動を取り上げられた場合に、私たちはなるほどそうかと思うんですけれども、ブライアンさんがどういふ基準で今日取り上げられた人物を特に強調して批判されているのか、やはり、特定の名前を出して批判されるということとは、批判された人は反論もあると思いますよ。ですから、それは非常に重要なことだと思います。名前を挙げて批判されているということは、そういう基準でそれをピックアップして今日この場で名前を出しておられるのかということですよ。

それから、単純な質問なんですけれども、私は最初の頃から存じ上げておりますけれども、青山学院におられた頃ですけれども、ではなぜ、禅を選ばれたのですか。そしてですね、このようなことは後からわかったことなんですか。それともあらかじめ、もうすでに、そのような禅であるとわかっておられたんですか。

禅だけじゃないと思いますよ、仏教は。他にも仏教には色々あるわけですから、選ぶとすれば、別な立場をおとりに

なつても良かったんじゃないか。たとえば今日は、私たちに、在日仏教徒であるようにお勧めになった。それはなかなか印象的な言葉でありますので、でしたらもっと、たとえば釈尊の立場そのものになるとかですね、そういうような選び方もできたんじゃないか。

二つ、質問ですね。生々しく名前が出ましたから、その本の中でも取り上げられていると思うんですけども、その基準をお伺いしたい。それから、ブライアン先生の、禪をボジションにおとりになっている理由ですね。これをお伺いしたい。

〔ヴィクトリア〕 いずれも大変な質問でございますが、できるだけ簡単に言いますと、一つ、基準の問題なんですけれども、こういう話もあるんです。英文で私の本が出た。それで、書評を書こうとして、アメリカ人だけれども元曹洞宗の僧籍があった方が、花園大学まで行って、そのの禅研究所の所長に会った。そしてその所長に会って、この本についてどう思いますかと。そしてその所長いわく、まず、「戦時中の老師方は、ピクトリアが言うようにそういう言葉は言わなかった。本は読んでないけど、そのような言葉はなかった」。彼はそれを頭から否定する。それだけじゃなくて、彼は次にこういうことを言った。「我々日本の禅僧にとっては、釈尊よりも仏法よりも師弟関係を重んじる。絶対に自分の師匠の

悪口を言いません」。

私はその場にいなかったけれども、後で聞いて、ああ、恐ろしいことですね。釈尊の弟子は、釈尊よりも仏法よりも師弟関係が大事、あれは儒教の思想ですね。仏教の思想ではない。この、禅宗は、一つはもう武士階級と手を結び、今度は儒教の価値観まで取り入れたのが私は今の禅宗だと思っています。道元禪師は、そこをはっきりと、中国に行ったときはそれを非常に批判しているわけですね。仏教は、中国においては三つの足で、はい仏教、はい道教、はい儒教。それを否定したのが道元禪師ですね。偉い。ところが、否定したにもかかわらず、今の曹洞宗、禅宗は、その社会倫理観たるもの、ほとんど全部儒教を嚙呑みにしてしまつたと私は思います。

だから、まず一つは、名前を挙げて言つたのは、その人の言葉を意識したからですね。今度は言わせまい。この人はこのときこう言いました。だから、あのようならためな反論は私は許さないと、ここで名前を挙げた。それが一つ。

もう一つは、ほとんどの方は駒澤大学関係で、本当は臨済宗の方はつるし上げたけれどもいたけれど、せつかく駒澤に来たから、曹洞宗関係、駒澤関係の方を選びました。私、私は思つて言つた。まあだいたいその二つの理由です。

それから、第三番目ですね。ある日本人が、これは曹洞宗の外の人がですが、私が本を書いているとき、彼はこういう風に言った。是非あの本を書いてほしい。なぜなら、我々日本人は言えない。人の名前まで。それをやったら、今度は後でいるんな、狭い日本の社会の中でいざこざがあるから、我々は言えない。だから、我々日本人に代わって言いなさい、と。まあ、それもあつたわけです。

次の質問なんですけれども、それは大変な問題。できるだけ簡単に言います。一つは、正直に言って、私、キリスト教は、生まれ育てられてだんだん大きくなるにつれて、これは何という幼稚な宗教。神様がいて、唯一の神様はこうである、そこが一つの幼稚な理由。キリスト教を誹謗していることになるけれども、私に言わせれば非常に幼稚な考え方。

それで、一番大きいのは、私の父の死。父が私の大学四年生の時に死んだ。父は天国に上がったか、地獄に墮ちたか、それを考えるだけでも、キリスト教の中で解決はなかつた。

フランス、人殺しはいかん、これはベトナム戦争以前の話で、私は一つの宗教的体験を通して、とにかく人を殺してはならん、と思つた。

私は、良心的徴兵忌避者になつた。志願書を出さなければならぬ。その時、自分の属するメソジスト教会は良心的徴兵忌避に対してどつちいう立場をとつてるかを私が尋ねた

ら、こういう返事があつた。メソジストは、徴兵に応じて、戦争に参加するなら、それはメソジストの考え方に合致する。そうじゃなくて、人殺しをしてはいかんと、だから徴兵に従わないと、それもまたメソジスト教会はそれを支援すると。なんというあいまいな。これでもよろしい、これでもいい。人殺しを、どちらでもいいというようなあの彼らの態度はあまりにも欺瞞的態度だと私は言いたい。

それから、もう一つは、自分の父が死んだとき、本当に悲しかった。その悲しみをどうするか。キリスト教の中で私は解決できなかった。だから、最初、クリスマス休暇を利用して日本に来て、じゃあ、仏教者はどう言つてるか。せつかく日本にいるんだから、それがきっかけ。それで私は、禅宗の行に、その坐禅に魅力を感じた。私の師匠にもまた非常に魅力を感じた。ここにいらつしやる僧侶の方も円満なお顔ですが、その存在そのものに魅力を感じた。

それで、仏教において私の悲しみは、それまで、父親を愛してるから私は悲しい、と思ひこんでいた。仏教の教理を読んでみると、そうじゃないですね。私自身、私というものは、父親のない寂しい者だと、だから、私の父のための愛情は実は自分自身に対する我執、執着であるといふことに目覚めた。そのとき私は初めて、自分の父は死んだ、だが、この私の悲しみは、父のための悲しみではなく、自分自身のための悲し

み、それを自覚することによって、私は心に非常に安らぎを得た。仏教のおかげで、生死の問題を若干私なりにわかってきたと思います。

じゃあ、その当時は、こういう問題がわかっていたかというのと、全然わからなかった。おそらくわかったならば、山田靈林にしても、樽林皓堂、あの人はもっと同じようなことを戦時中は言ってるわけですけども、もし、私が尊敬した諸先生方は、実はこういう人であったということをおわかっていたならば、駒澤にいらなかったでしょう。少なくとも私、毎日彼らをつるし上げたでしょう。それで退学させられたでしょう。ある意味において、幸いにして私は知らなかった。

それで、多くの欧米の修行者たちは、鈴木大拙のことを今でも信じている。鈴木大拙は何を言っているかというのと、仏教はかつて聖戦に加盟したことは一度もありません。あの人は、禅と日本文化の序文の中にそう書いてある。私はそのとき、実はそれを信じ込んでしまった。いうならば、鈴木大拙に騙された。ということになるでしょう。もう、少しずつ目覚めてきたけれども。

まあここに、一番はじめに言ったように、じゃあ、仏教をやめれば、キリスト教になればもうこういう問題はありませんか、回教になれば、いや、みんな持っている。じゃあ、無神論者、無宗教論者になるか。それとも、ここで何とかしてみ

なさんと改めるか。私は、とりあえず、仏教はこういう問題に関して、釈尊の教えを研究すれば、このような発言は決して仏教に非ず、という自信を私は持っている。だから仏教は、聖戦ときっぱりと手を切り離す。

日本の仏教はなんとつまらん、と言つ人はいるかもしれない。私は逆に、仏教者こそ、または、あなた方日本人こそ、あなた方日本人は、あれだけの苦い経験をしてきたんだから、あなた方こそ、この世界の先頭に立って、聖戦とはどれだけ無意味、どれだけの嘘つきだと、あなた方こそわかるはずです。だから、その意味合いにおいては、逆に仏教者が過去にそういう態度をしてきたからこそ、また仏教者に対する期待も大きいのです。

(補註) その後、臨済宗妙心寺派では、二〇〇一年九月二十七日、臨済宗妙心寺派第一〇〇次定期宗議会において、米国における同時多発テロを契機として、追悼と反戦のアピールと共に、以下の如く自宗の戦争責任にも言及した「宣言」を採択した。

〔前略〕

かえりみまずと、かつて我が国も聖戦の名のもとに戦争を遂行し、彼我各国に多大の苦痛と損害を与え、たとえ國策とはいえ結果として、戦時の高揚した国民感情の中で、我が宗門が砥柱のごとく反戦を貫くことが出来得ず協力し

『禅と戦争』から考える(ヴィクトリア)

て来たことに対し誠に遺憾に思うものであります。ますこの過去の過ちに対する懺悔と反省の上に立って、諸民族の多様な生活や価値感、信条、宗教を尊重しつつ、日々の教化活動において我が禅門の宗旨を宣揚し、世界の平和のために一層努力しなければなりません。〔中略〕

いずれにしても悲惨な人生を送り、不条理な死を余儀なくされる人が、この地球上に一人たりとも存在することのないよう釈尊の御心を体して、宗門人一人一人がこれを主体的に受けとめて実践することができるようにここに決意し、宣言する。

(『正法輪』第五一巻第一一号、六頁)

(二〇〇一年七月二日、駒澤大学仏教学会公開講演会における講演。なお、講演は日本語で行われた。)